

実践報告 (Practical Research)

## 集団活動において困難が目立つ幼児への 運動を軸とした支援

渋谷郁子<sup>1)</sup>・少徳 仁<sup>2)</sup>・藤井奈央子<sup>3)</sup>・中村友美<sup>3)</sup>・

笹井久嗣<sup>4)</sup>・樽谷友理<sup>4)</sup>・芳本有里子<sup>5)</sup>

(鈴鹿短期大学<sup>1)</sup>・竜王西小学校<sup>2)</sup>・竜王町ふれあい相談発達支援センター<sup>3)</sup>・

花ノ木医療福祉センター<sup>4)</sup>・大阪医科大学LDセンター<sup>5)</sup>)

### Movement-centered Support for Children with Difficulties in Group Activities

SHIBUYA Ikuko<sup>1)</sup>, SHOTOKU Zin<sup>2)</sup>, FUJII Naoko<sup>3)</sup>, NAKAMURA Tomomi<sup>3)</sup>,

SASAI Hisashi<sup>4)</sup>, TARUTANI Yuri<sup>4)</sup> and YOSHIMOTO Yuriko<sup>5)</sup>

(Suzuka Junior College<sup>1)</sup>/ Ryuoh-Nishi Elementary School<sup>2)</sup>/ Ryuoh-cho Developmental Support Center for child and adolescent with developmental disorder<sup>3)</sup>/ Hananoki Medical and Welfare Centre<sup>4)</sup>/ Osaka Medical College LD Centre<sup>5)</sup>)

A series of movement-centered supports was developed, in order to explore the possibilities of a general support for so-called "children of concern." The participants were four children, aged 4 and 5, who were reported by their preschool teachers as having distinct difficulties in group activities. According to the occupational therapist's assessments, the children had problems in muscle tension throughout the body, postural balance derived from it, and manual dexterity. Moreover, cognitive problems were also implicated such as difficulty in understanding instructions, poor communication, and immature body image. The two-hour physical exercise program was conducted for them twice a month, ten times in total. This program put emphasis especially on dynamic balance aiming for alleviating their weakness of postural stability. The effectiveness of supports was examined by the children's motor activities and ex-post assessments. The results showed that their problems in both gross dynamic balance and fine motor with scissors were improved. Their body image and eye-hand coordination developed. Furthermore, their mothers told that the children changed their life attitude. These implied that movement-centered support could have positive effects on children's life in general. However, the problems in fine motor with chopsticks and interpersonal relationship were not sufficiently improved.

**Key Words** : children of concern, support, movement, group activity, motor difficulties

キーワード : 気になる子ども, 支援, 運動, 集団活動, 不器用

## I. 目的

1990年代中頃から、保育・教育現場では、発達障害の診断は有していないものの、集団活動において不適応を起こしがちな子どもを表現するのに、「気になる子ども」ということばが用いられるようになってきた。これを受け、教師や保育者の抱く「気になる」印象の内実を検証しようとする研究が行われた。その結果、「気になる子ども」の知的側面に著明な遅れはないが、落ち着きがない、感情のコントロールが難しい、他児とのトラブルが多いなどの特徴がみられることが示された（本郷・澤江・鈴木・小泉・飯島, 2003）。また、話を聞けない、多動、きれやすい、生活習慣が未熟、集団活動が苦手など、広汎性発達障害や学習障害、注意欠陥多動性障害に類似する特性が見出された（池田・郷間・川崎・山崎・武藤・尾川・永井・牛尾, 2007）。

最近では、「気になる子ども」をめぐる関心は、保育・教育現場における子どもとその保護者に対する支援のあり方に移行してきたようである（e.g. 木曾, 2011; 藤井・小林・張間, 2011）。「気になる子ども」は発達障害の診断を持たず、特別支援の対象になりにくいことから、通常的生活の中でどのような支援ができるかが問われている。

久保山・斉藤・西牧・當島・藤井・滝川（2009）によると、保育者が実際に行っている支援は、「個別のかかわり・声かけ」など、日常の保育の量的な拡大といえる内容がほとんどで、「指示の仕方」「関係調整」「活動の設定」など、質的な部分に工夫を凝らすような支援は、あまり実践されていなかった。「気になる子ども」の特徴をとらえ、それを生かした支援を日常的に行っていくのは、易しいことではないのだろう。この原因の一つとして、前述したように、「気になる」特徴が多岐にわたっていること（本郷他, 2003 前出；池田他, 2007 前出）が挙げられる。「気

になる」点が多様である場合、子どもの困難さが一つのまとまった像を結ばず、結果的に何に焦点を当てて支援すればよいのか、判断しにくくなってしまっているのではないかと考えられる。

小西（2011）は、発達障害児の状態像が曖昧で、実体がかみにくいことを指摘した上で、さまざまな発達障害に共通する特徴として、知覚と運動の問題を取り上げている。それによれば、発達障害児には、姿勢保持の困難や手先のぎこちなさといった、身体的な不器用さが存在するという。これは、発達障害に類似する特徴を併せ持つ「気になる子ども」についても、当てはまる現象だと推察される。実際に、手先やバランスの運動などの協調運動がうまくいかない子どもでは、「落ち着きのなさ」や「消極性」などの行動的問題が深刻であり、それらの問題によって、保育園や幼稚園でさまざまな活動を経験する機会を逸しているのではないかと指摘もある（渋谷, 2008）。

これらのことから、「気になる子ども」を支援する際、運動の問題に焦点を当てることが重要ではないかと考えられる。本稿ではこのような観点から、関西地方のX町にある発達支援センターで、いわゆる「気になる子ども」に対して実施された支援について報告する。この支援は、身体運動に関する問題に的を絞ったもので、組織立った身体活動を行うことが、子どもにどのような変化をもたらすのか、検討することを目指していた。

子どもの変化の指標として、子どもの運動そのものの観察や、子どもの生活についての保護者からの聞き取りのほかに、ボディイメージや目と手の協応の発達を用いた。このうち、ボディイメージとは、視覚、聴覚、皮膚感覚、深部感覚などの身体感覚の体験を基に、さまざまな心理・社会的体験が加味されて形成される、自己身体に関する概念をいう（Shilder, 1935）。意識的に身体を動かす経験をすることで、自己身体

についての概念に変化が起こるのではないかと予測した。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象

X町は人口約12,000の小さな町で、日頃から、発達支援センターと保育・教育機関とは密接に連携をとり、巡回相談を行って子どもの発達の経過をきめ細かく把握している。そうした状況の下、町内の公立幼稚園から、引っ込み思案、指示がわからない、友達と遊べないなど、集団活動において何らかの困難がみられ、支援が必要だと教師から報告のあった、4歳児クラスの幼児を4名選出した。教師はまた、この4名について、よくこける、動作が遅い、音楽のリズムに合わせられないといった、運動の不器用さも指摘していた。全員が乳児期から、発達支援センターの経過観察の対象であったが、療育教室などで集団あるいは個別の指導を受けた経験はなかった。

### 2. 支援時期および場面

20XX年4月から9月にかけて、月に2回／全10回、発達支援センターの運動療法室を使用し、運動を軸とした支援を行った。対象児4名は合同で、1回につき2時間程度の運動プログラムを受けた。

この取り組みにおいては、発達支援センターのセンター長が全体を統轄するコーディネーターとなり、実際の支援場面では、臨床心理士2名と作業療法士2名が、直接子どもの指導に当たった。

子どもが運動している間、子どもの母親は同室にて子どもの様子を観察するほか、キャッチボールの相手など、子どもの運動を補助する役割をとることもあった。また、子育てで気になっていることを、コーディネーターや作業療法士

に尋ねたり、母親同士で意見を交換し合ったりして過ごした。

### 3. 手続き

支援を開始するにあたって、作業療法士が子どもの運動を観察し、どのような問題があるのかを把握した。このとき、指示が伝わりにくするなど、直接に運動に関わる以外でも、対象児を理解する上で重要な点については、同時に報告された。こうした作業療法士による運動の観察は、プログラム実施のたびに参与観察で行われ、その都度、子どもの運動の変化が記録された。

運動プログラムの内容は、作業療法士の最初の見立てを基に組み立てられた。詳細は後述するが、約2時間のプログラムの前半に、トランポリンやホーススイングなど、全身を使う粗大運動を集団で実施し、後半に机上課題として、塗り絵、ハサミで紙を切る作業、のり付けなど、微細運動を行った。また、水分補給と休憩を兼ねた時間を設け、お菓子の小袋を開ける動作課題などを取り入れた。

支援実施前の4月に、子どもの精神発達およびボディイメージの発達を知るためにK式発達検査と人物画知能検査（以後DAMと記す）を、目と手の協応の程度を知るためにフロスティック視知覚発達検査（以後DTVP-2と記す）を、それぞれ行った。また、支援実施後の9月には、DAMとDTVP-2を再度行った。さらに、支援実施の前後に、全般的な子どもの様子について、母親からの聞き取りを行った。

## Ⅲ. 結果

これより、4名の対象児を順に、A児、B児、C児、D児と記す。まずは、支援実施前に行った複数のアセスメントから、4名の特徴を描き出し、その特徴に基づいて構成した運動プログ

ラムの詳細について述べる。続いて、支援の効果について、対象児の運動そのものにおける変化や、事後のアセスメントの結果を示しながら検証を行う。

### 1. 複数のアセスメントからみる対象児の姿

支援実施に先立ち、作業療法士が行った観察 (Table 1) からは、対象児に共通して、全身の筋緊張の問題や、それに由来すると考えられる姿勢・バランス保持の問題、および指先の操作・模倣の問題などが示唆された。また、構音や方向知覚の問題、指示の伝わりにくさや意思疎通の図りにくさなど、広範な問題が指摘された。

続いて、支援実施前に行った各アセスメントの結果を Table 2 に示した。ここから読み取れる 4 名の特徴は以下のものであった。まず、A

児については、精神発達に遅れはないが、認知適応に比べ、言語領域の発達がやや遅いこと、ボディイメージの発達が生活年齢より 1 年ほど遅いこと、しかしながら目と手の協応には優れていることがわかった。B 児については、知的に境界線級であり、ボディイメージの発達が生活年齢より 1 年ほど遅いこと、目と手の協応の発達が生活年齢より 1 年ほど遅いことがわかった。C 児については、知的に境界線級であり、ボディイメージの発達が生活年齢より 1 年ほど遅いこと、目と手の協応の発達が、生活年齢より 4 ヶ月ほど遅いことが示された。D 児については、精神発達に目立った遅れはなく、ボディイメージの発達は年齢なりであるが、姿勢運動領域の発達が生活年齢よりも相当遅いこと、目と手の協応の発達にかなりの困難さがあること

Table 1 対象児に関する作業療法士の見立て

年齢	性別	運動に関するもの	その他
A 児	5:0 男	とても身体がかたい、カ行がタ行になるなど構音の問題がある、箸やペンの把持で中指と示指の分離が不十分、机上操作時の姿勢保持が難しい、全身の左右差が強い、指の模倣を視覚に依存している	
B 児	5:0 男	低緊張で身体がクニャクニャである、ケンケンが苦手である、サ行がタ行になるなど構音の問題がある、モデルと見比べても指の模倣の達成が難しい	
C 児	5:0 男	「まっすぐ」のイメージに乏しい、低緊張で身体がクニャクニャしている、ケンケンが苦手である、前後左右の区別が曖昧、サ行がタ行になるなど構音の問題がある、指の模倣を視覚に依存している	指示が伝わりにくい
D 児	4:1 女	お腹の筋緊張が弱いので背中中で身体を支えている、ケンケンが苦手である、手指の分離が不十分で「グー」の状態での操作が多い (指先をひっかけるように使用)	視線が合いにくく意志疎通が図りにくい

Table 2 支援実施前の各アセスメントの結果

	A 児	B 児	C 児	D 児
K 式発達検査 (発達指数)	認知適応 113 言語社会 90 全領域 103	認知適応 84 言語社会 79 全領域 80	認知適応 79 言語社会 79 全領域 79	姿勢運動 62 認知適応 87 言語社会 91 全領域 87
DAM (精神年齢)	3 歳 8 か月	3 歳 10 か月	3 歳 8 か月	4 歳 1 か月
DTVP-2: 目と手の協応 (知覚年齢)	6 歳 0 か月	4 歳 0 か月	4 歳 6 か月	~ 3 歳 11 か月 (下限)

がわかった。

最後に、母親からの聞き取りで明らかになった対象児の生活全般に関する様子について、Table 3 に示した。ここから、A 児は心理的緊張がかなり強く、消極的であることがわかった。また、B 児は多動が目立ち、手先の道具操作が苦手であった。C 児は会話の流れを読まずに一方向的に話す傾向があり、D 児は集団で遊ぶ経験に乏しく、注意が途切れやすいことが示された。

このような、複数のアセスメント結果からみた4名の発達の特徴をまとめ、Table 4 に示した。対象児らに、運動に関するものから心理社会的なものまで、さまざまな側面の困難が存在することが示唆された。

## 2. 運動プログラムの詳細

支援実施前のアセスメントを踏まえて、一連の流れの中で実施できる運動プログラムを組んだ (Table 5)。A 児を除く3名にケンケンの苦手さなど、運動中の姿勢保持の困難が見られたため、動的バランスを必要とする運動を多めに取り入れた。

対象児らは、回を追うごとに積極的にプログラムをこなすようになり、後述するように、運動スキルの向上も認められた。こうした子どもの変化に応じ、一本橋の傾斜を大きくしたり、トランポリンやホーススイングに、それに触れたり蹴ったりするための的を導入したりして、子どもの興味関心が持続するように、プログラムの内容を発展させた。

Table 3 支援実施前の母親からの聞き取り

	運動に関するもの	その他
A 児	身体がかたく動きが遅い、なわとびをとべない、慎重過ぎて遊具で遊ばない	何事も促さないと取り組まない、意地悪をされても気づかない、母親から離れない、気軽に他の人とおしゃべりできない
B 児	低出生体重児だったのでこれでもよく育ったと思う、幼稚園では運動のことで特に困っていない、よく動く、よく転ぶ、発音の幼さが気になる、握り箸で（手でも）食べる	10 までは数えられるが数の理解があやしい、きょうだいゲンカが激しい
C 児	低出生体重児だったのでこれでもよく育ったと思う、幼稚園では運動のことで特に困っていない	妄想で話す（会話の流れを読まずに自分の思いを一方向的に話す）
D 児	集団で遊ぶ経験が乏しい	注意が持続せずに遊びがどんどん変わっていく

Table 4 対象児の発達の特徴

	運動に関するもの	その他
A 児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボディイメージの発達が生活年齢より遅い</li> <li>・目と手の協応には問題ないが、指先の使い方が少し不器用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知適応に比べ、言語が弱い</li> <li>・心理的緊張が強く消極的</li> </ul>
B 児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボディイメージの発達が生活年齢より遅い</li> <li>・多動</li> <li>・手先の道具操作（鉛筆や食具の扱いなど）が難しい</li> <li>・足の支えが弱い（ケンケンや両足ジャンプが苦手）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的には境界線級である</li> </ul>
C 児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボディイメージの発達が生活年齢より遅い</li> <li>・多動</li> <li>・目と手の協応には特に問題なく、道具操作も可能</li> <li>・足の支えが弱い（ケンケンや両足ジャンプが苦手）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知的には境界線級である</li> <li>・状況理解が弱い</li> <li>・他者に合わせた対応ができない</li> </ul>
D 児	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボディイメージの発達は年齢なりである</li> <li>・目と手の協応に問題があり、細かい動作が苦手である</li> <li>・足の支えが弱い（ケンケンや両足ジャンプが苦手）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・注意が途切れやすい</li> <li>・視線が合いにくい</li> <li>・同年齢の子どもとうまく遊べない</li> </ul>



Table 5 運動プログラムの詳細

カテゴリ	項目	内容
微細運動	塗り絵	キャラクターに色鉛筆で色を塗る
	ハサミ	色塗りをしたキャラクターを切り取る
	のり付け	紙に別の紙を貼りつける
	お菓子の袋開け	お菓子の小袋を開ける
静的バランス運動	ポーズ (カメ, アヒル, ウサギ)	あらかじめ決められたカメのポーズなどをとり, 身体を静止させる
	トランポリン	トランポリン上で天井から下がったなどに触れる
動的バランス運動	一本橋	巧技台を用い, 高さのある一本橋を歩く
	はしご	巧技台を用い, はしごをのぼる
	ホーススイング	天井から吊るしたブランコに乗り, バランスをとったり, 的をめがけてキックしたりする
	バランスボード上での キャッチボール	バランスボードに乗りながら母親と対面でキャッチボールをする

### 3. 運動の問題に関する支援の効果

運動プログラムが, 対象児らの運動の問題にどのような影響を与えたのかをみるため, ここでは, 二種類の運動課題を取り上げる。動的バランス運動に含まれるトランポリンを用いた運動と, 手先の微細運動に含まれるハサミを用いた運動である。

トランポリンを用いた運動からは, 姿勢の安定性や質, 手などの連合運動, 時間的な協調性(タイミング)などの発達状態を知ることができる。子どもの取り組みの様子に応じて, 跳ぶ, 回りながら跳ぶ, 跳びながら足でグーチョキパーをする, 跳びながら天井から吊り下げられた的に手で触れるなど, 複数の動きを導入した。

支援実施当初は, A 児と D 児はトランポリン上でバランスをとるだけで精一杯であった。また, B 児と C 児は跳ぶことはできるものの, 同じ場所で跳び続けることができず, 不要な手の連合運動が認められた。このように姿勢の不安定さが目立ったが, 支援実施後には, A 児, B 児,

C 児は, 天井から吊り下げられた的に手で触れることができるようになった。また, B 児はより高く跳べるようになり, C 児は回転しても余裕を保てるようになった。D 児はトランポリンの真ん中に位置を保ち, 回転して跳べるようになった。一方で, A 児については, 高く跳ぼうとすると心理的に不安になる, B 児, C 児, D 児についても, 的を見ながら跳ぶと頸部が不安定になるなど, いくつかの未達成な部分が残された。

ハサミを用いた運動からは, 手首の安定や手の開閉, 指のコントロール, 両手の協調, 腕や手と目の協調, 部分と全体の理解, 形の理解などの発達状態を知ることができる (Klein, 1990)。本報告では, ハサミを使うときの運動の正確さに注目し, 支援実施当初の結果と, 支援終了直前の9月のそれを比較した。

運動の正確さを算出するにあたって, 課題図形を1cm毎に区切り, 各ブロックでの逸脱量をmm単位で測定し, その総計を課題図形の全長で除し, 1cm毎の逸脱量を算出した (Table 6)。

Table 6 ハサミで紙を切る際の課題図形からの逸脱量の変化

	A 児	B 児	C 児	D 児
支援当初	0.0 ~ 0.0mm	1.4 ~ 3.3mm	0.0 ~ 0.3mm	0.0 ~ 3.2mm
支援終了	0.0 ~ 0.0mm	0.3 ~ 0.9mm	0.1 ~ 0.2mm	0.8mm

その結果、当初逸脱量が多かったB児に、顕著な改善が見られ、D児においても逸脱が少なくなっていた。

以上のことから、運動を軸とした支援は、全身を使った動的バランス運動、ハサミ操作などの微細運動のいずれにおいても、その技能を向上させる効果があることが示唆された。

#### 4. ボディイメージおよび目と手の協応の発達に関する支援の効果

支援実施後のDAMおよびDTVP-2の結果（Table 7）からは、DAMではD児以外の3名の、

DTVP-2では4名全員の成績が向上したことが示された。これにより、運動を軸とした支援が、ボディイメージや目と手の協応の発達を促進する可能性が示唆された。DAMにおける人物画の変化について、Figure 1に示した。全員に共通して、描線が明確になったほか、A児とD児については、顔だけだった人物画に、胴体と足が付け加えられた。ただし、DAMの結果には、ボディイメージの発達のほかに、人物知覚様式や描画技術といったものが反映されるとする見方（Arnheim, 1954）もあり、解釈は慎重に行う必要がある。

Table 7 支援実施後の各アセスメントの結果

	A児 (5:5)	B児 (5:5)	C児 (5:5)	D児 (4:6)
DAM (精神年齢)	4歳11か月	4歳1か月	4歳1か月	3歳8か月
DTVP-2: 目と手の協応 (知覚年齢)	7歳7か月	5歳10か月	6歳2か月	4歳3か月

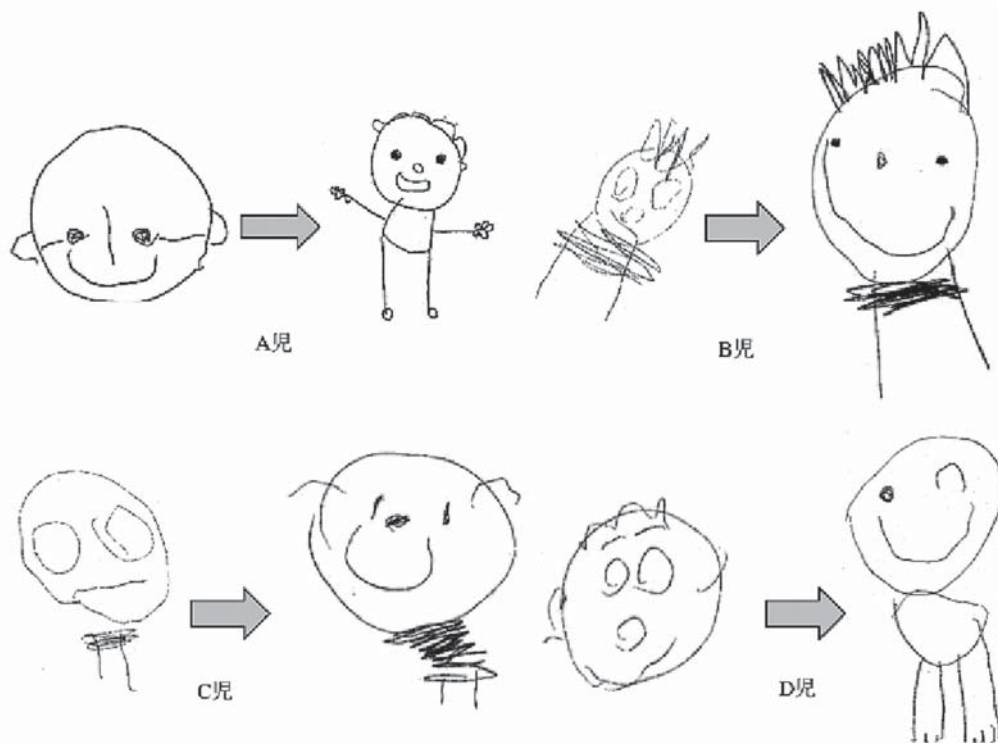


Figure 1 DAMにおける人物画の変化

## 5. 生活全般に関する支援の効果

支援終了後に母親から聞き取った内容を、Table 8 に示した。全体としては、対象児らの生活態度に変化がみられ、以前母親が気にかけていた部分が改善されたことが報告されたが、依然として残っている問題点があることもわかった。

まず A 児については、当初みられた強い心理的緊張が減少し、嫌だった感触を楽しめるようになったり、活発な友だちと遊ぶようになるなど、知覚や運動に関する経験に、より積極的になったことが察せられた。

続いて B 児は、歩行や跳躍中に両足で全身を支えられるようになった。また、多動が軽減したのか、集団活動の中で、教師の指示が聞けるようになった。しかしながら、箸の扱いなどにおける不器用さは、依然として残っていた。

C 児は、まわりの会話の流れを読まずに、自分の思いを一方向的に表現する傾向が強く、以前は一斉指示での反応が弱かったが、集団活動の中で、周りの動きに気づいて自ら動き出せるようになった。だが、箸の扱いが困難であるためか、食事に時間がかかっていた。

最後に D 児は、途切れやすかった注意を持続して、1つの活動をやりきることができるようになった。現在、母親にはこれとって気になる点はないということだった。しかし、対象児の指導を行った臨床心理士が、後日幼稚園を巡回したところ、思いをことばで伝えられず、手を出してしまう場面や、女兒の集団の仲間に入れてもらえなくなってきている様子などが観察された。このように、集中力に関する問題は減少したが、集団活動における対人的な問題については、課題が残された。

## IV. 考察

運動を軸とした支援における、事中、事後のアセスメントの結果から、運動技能そのものが改善されたり、目と手の協応の発達が向上したことがわかった。また、ボディイメージの発達が促進される可能性も示唆された。ほかに、運動の問題に直接には関係しないが、生活態度の面において、意欲が高まり積極的になったり、指示が聞けるようになったり、集中力が増したりなど、日常活動の中で気づかれる程度の変化

Table 8 支援実施後の母親からの聞き取り

	運動に関するもの	その他
A 児	嫌がっていた粘土を欲しがり触れるようになった、鏡文字になるときもあるが名前が書けるようになった	声が大きくなり近所の人にも話しかけられるようになった、母親にべったりでなくなり活発な友だちにもついていくようになった、字が読めるようになった
B 児	歩いているときの転倒が減り以前よくケガをした幅 1m 程度の側溝に落ちなくなった、側溝を飛び越えられるようになった、お箸は握り箸のまま、ボタンやファスナーの扱いに時間がかかる、ボタンやファスナーをつまむことができない、補助輪付きの自転車でカーブを曲がるのが難しく転倒する	幼稚園の教師から慎重で指示がよく聞けると言われた
C 児	補助輪付き自転車が乗れるようになった、食事に時間がかかる (30 分以上)	幼稚園の教師から一斉活動で周りの動きに気づいて動き出すようになったと言われた
D 児		気が散るのが減り、集中できるようになった (例: 50 ピースのパズルをやりきる、ビデオをセリフを覚えるまで見る) / 大人しく、聞き分けがよくなった / 今は特に困ったことはない



が生じたことが示された。

本報告では、対照群との比較が為されていないため、子どもに生じた変化が、運動を軸とした支援だけによるものかは断言できない。だが少なくとも、こうした支援が「気になる子ども」の呈する問題の軽減に、効果的にはたらく可能性を示唆したことは確かであろう。

これまでも、知覚や運動を媒介とする介入方法は、多く提唱されてきた（e.g., Ayres, 1972; Frostig & Horne, 1973）。これらは、運動や知覚に関する経験を通して、学習に問題のある子どもにおける視知覚や学力の向上を目指そうというものであった。しかしながら現在では、こうした支援法が、あまり効果的ではないことが明らかになっている（e.g., Kavale & Mattson, 1984; Poratajko, Kaplan, & Wilson, 1992）。

本報告での運動を軸とした支援は、そうした、運動と何か別の認知的な能力との直線的な関係を想定するものではなかったが、結果的に、子どもの外界への向かい方を変化させたと考えられる。対象児らは当初、「消極性」「多動」「状況理解の困難」「不注意」など、外界への向かい方に特徴的な問題を抱えていた。しかし、外界との相互作用の基盤となる運動の安定性を増すことで、より積極的に、より注意深く外界に関わることができるようになったのではないだろうか。

だが、このような支援法にも限界がある。たとえば、箸使いなどの特定の道具操作や、対人関係の調整などには、目立った効果は表れなかった。このような側面については、当該領域に特化した支援や訓練を行っていく必要があるのだろう。

以上のことから、運動を軸とした支援は、運動そのものの改善や、運動に関連する諸側面（目と手の協応やボディイメージ）の発達の促進などに加え、意欲の低さや情報の取り込みの困難さといった、人間の活動を下支えしている側面

について、その改善を後押しする可能性が示唆された。しかし、こうした支援だけでは改善が見込めない活動もあり、それらには、より高度な技能や複雑な認知的、社会的プロセスなどが関与していると考えられる。

残された課題として、運動を軸とした支援を、たとえば幼稚園や保育園、家庭といった、通常の生活空間の中でどのように実現していくかということがある。先述したように、「気になる子ども」に特別支援が適用されにくいことから、本報告での場面設定よりも、人的にも環境的にも限られた状況を念頭に置いて、具体的な提案を行っていくことが求められる。

## 謝 辞

ご協力いただきました、園児の皆さん、保護者の方々、園の先生方に感謝いたします。

## 引用文献

- Arnheim, R. (1954) *Art and Visual Perception*. Berkley: University California Press.
- Ayres, A. J. (1972) Improving academic scores through sensory integration. *Journal of Learning Disabilities*, 5, 338-343.
- Frostig, M. & Horne, D. (1973) *Frostig Program for the Development of Visual Perception*. Cicago: Follett.
- 藤井千愛・小林真・張間誠紗 (2011) 保育園における“気になる子ども（特別なニーズを有する子ども）”への特別支援保育：広汎性発達障害が疑われる男児の事例研究. 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 5, 131-139.
- 本郷一夫・澤江幸則・鈴木智子・小泉嘉子・飯島典子 (2003) 保育所における「気になる」子どもの行動特徴と保育者の対応に関する調査. 発達障害研究, 25, 50-61.
- 池田友美, 郷間英世, 川崎友絵, 山崎千裕, 武藤葉子, 尾川瑞季, 永井利三郎, 牛尾禮子 (2007) 保育所における気になる子どもの特徴と保育上の問題点に関する調査研究. 小児保健研究, 66, 815-820.

- Kavale, K. & Mattson, P. D. (1983) One jumped off the balance beam: Meta-analysis of perceptual-motor training. *Journal of Learning Disabilities*, 16, 165-173.
- 木曾陽子 (2011) 気になる子どもの保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス：保育者の語りの質的分析より. *保育学研究*, 49, 200-211.
- Klein, M. D. (1990) *Pre-scissor Skills: Skill Starters for Motor Development*. Tucson, AZ: Communication Skill Builders.
- 小西行郎 (2011) 「発達障害の子どもを理解する」. 集英社.
- 久保山茂樹・齊藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 (2009) 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査：幼稚園・保育所への機関支援で踏まえ  
るべき視点の提言. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 36, 55-76.
- Polatajko, H. J., Kaplan, B. J., & Wilson, B. N. (1992) Sensory integration treatment for children with learning disabilities: Its status 20 years later. *Occupational Therapy Journal of Research*, 12, 323-341.
- Schilder, P. (1935) *The Image and Appearance of Human Body*. New York: International University Press.
- 渋谷郁子 (2008) 幼児における協調運動の遂行度と保育者からみた行動的問題の関連. *特殊教育学研究*, 46, 1-9.
- (2012. 7. 17 受稿) (2012. 10. 15 受理)